

2020年に米国は石油の純輸出国になる！ ～E I Aが「短期エネルギー見通し」で発表～

米国が2020年から年間通しての石油純輸出国となるとの予測を米国のエネルギー情報局（E I A）が発表した。これまで週間ベースでは、昨年11月最終週と今年2月の第4週に石油（原油と石油製品）の輸出量が輸入量を上回る純輸出状態となることはあったが、米国が年間通しての純輸出国となるのは初めてのことだ。これはE I Aが2月12日（日本時間13日）発表の「短期エネルギー見通し（Short-Term Energy Outlook）」で明らかにされ、3月12日発表の「S T E O」でも確認された。

<2020年、輸出が輸入を7万バレル/日上回る>

3月発表の「S T E O」によると、米国のネットの石油輸入量（輸入量から輸出量を差引いた量）は、2017年が380万バレル/日、2018年が234万バレル/日となっていたが、2020年にはマイナス7万バレル/日となることを見込まれるという。米国はこれまでも石油製品に関しては純輸出国だったが、原油の輸出量がこの数年で大幅に増加して、石油製品と原油を合わせた石油輸出量では輸出量が輸入量を上回る事となる。

<360万バレル/日の原油輸出の週も続く>

米国は世界第2位の原油輸入国（2017年までは世界1）。年間700～900万バレル/日を輸入してきた。原油輸出に関しては、例外的にカナダへの輸出は数万バレル/日程度行われてはいたが、世界に向けての輸出は2015年12月に41年ぶりに解禁されたばかり。その一方で米国の原油生産量は、2005年の500万バレル/日のボトムから現在では2.4倍の1,200万バレル/日にも増加している。いうまでもなくシェールオイルの生産が急増したためだ。ところが、シェールオイルは大半が軽質原油。これに対して米国が輸入する原油はカナダ、メキシコ、ベネズエラの重質原油・超重質原油や中東の中重質原油ばかり。ここから石油需要の46～47%占めるガソリンを造り出さなければならない。これに対応するため、米国の製油所の大半が重質原油対応に変えられてきた。急増するシェールオイルは使えない。原油在庫はどんどん増加する。こうした事情が原油輸出を短期間で増やしてきた。2月には360万バレル/日の原油輸出を記録する週があったほど。

<石油製品の輸出も増加が続く>

これに対して石油製品は、1,860万バレル/日の精製能力を90%以上稼働させ大量に生産する。ガソリン基剤などは欧州や周辺諸国からも輸入する。このため、ガソリンや暖房油・ディーゼルなどの完成品が余剰となる。これらを近年は中南米・カナダだけでなくアジアへも輸出してきた。以上のような結果、近年では米国の原油輸出が増加する一方で、石油製品の輸出も増加していくこととなった。米国は元々石油製品の最大に輸出国。これに原油の輸出増が重なったわけだ。E I Aでは2018～2020年の原油と石油製品のネット輸入量、及びその両方を合わせた石油のネット輸入量を次のように見込んでいる（単位・万バレル/日）。

	2018年	2019年	2020年
原油	+575	+466	+463
石油製品	-341	-370	-470
石油計	+234	+96	-7

< I E Aは2021年の米国の石油純輸出国化を予測 >

E I Aが1月24日に発表した「エネルギー展望2019」では、米国が純輸出国となるのは2020年代の早い時期としていた。また、3月11日に国際エネルギー機関（I E A）が発表した「2024年までの石油市場見通し」では、「米国は2021年に石油の純輸出国になる」としており、今回の「3月短期エネルギー見通し」でE I Aは、1年ほど前倒しで純輸出国化を宣言したこととなる。なお、四半期ごとにみると、E I Aは「2020年第4四半期で91万バレル／日の純輸出が実現する」と見込んでおり、この第4四半期の輸出の拡大が、2020年通年の純輸出国化を早める形となると見込んだこととなる。

